

〔論 説〕

カンボジアにおける教育支援・地域人材育成に関する一考察

——「アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構：Joint Support Team for Angkor Community Development：JST」の取り組みを事例として——

沖 塩 有希子

はじめに

筆者は、アンコール遺跡群の所在地であるカンボジア王国 (Kingdom of Cambodia, 以下ではカンボジアと表記)⁽¹⁾のシェムリアップ (Siem Reap) に、遺跡の保全・インフラ整備・教育支援・地域人材育成などの推進を目的として1994年に設立され、2005年にローカル NGO として認可された「アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構：Joint Support Team for Angkor Preservation and Community Development：JST」(以下ではJSTと表記)の取り組みを見聞する機会を得た。

そこで、本稿では、同組織が手がけている上記の事業のなかでも教育支援と地域人材育成に焦点をあてたケース・スタディーを行うことにしたい。

JSTが教育支援と地域人材育成をねらいに展開している具体的な活動の1つに、「バイヨン中学校」の創設と運営(第2章第2節で言及)がある。このバイヨン中学は、地域住民や海外の支援者と提携しながら学校運営や人材育成に尽力してきたその実績が認められ、カンボジア王国教育大臣から功労賞を2018年に授与されている⁽²⁾。こうした定評を持つ学校の創設・運営などをはじめとするJSTの取り組みは教育支援や地域人材育成における成功例ともいえるので、カンボジア全体としての教育支援・地域人材育成の実相に迫ることにはならないかもしれないが、同組織による事業を足がかりに、カンボジアの教育支援と地域人材育成のあり方を検討することには一定の意味があるものと考えられる。

なお、検討の主たる資料源としては、筆者自身が見聞した内容(JSTの代表を務めるチア・ノル [Chea Nol] 氏とパートナーである小出陽子氏夫妻 [以下ではチア夫妻と表記]⁽³⁾とのやりとり [筆者の訪問時にガイドしてくれた際の口述やインターネットでの質疑応答])、およびJSTのホームページ⁽⁴⁾の記載内容を用いる。

以降の論の流れであるが、第1章ではJSTの活動の理念および活動の概要、第2章で

(1) カンボジア王国 (Kingdom of Cambodia) は、東南アジアのインドシナ半島南部にある立憲君主制国家。人口は1,601万人 (2017年の国連推計)、ボル・ポト政権時代の虐殺や内戦の影響から若年層の比率が高く、全人口の8割程度が農村部に集中するその一方で、首都プノンペンにも人口の10%以上が流入する。国民の90%以上がクメール語 (カンボジア語) を話し、上座部仏教を奉ずるクメール人 (カンボジア人)。同国の教育の概要については第2章第2節で言及することにする。

(2) シェムリアップ州の小学校・中学校・高等学校で受賞された10校のうちの1つである。

はJSTによる教育支援・地域人材育成の実際、第3章ではJSTの教育支援・地域人材育成をめぐる背景として、バイヨン中学校の生徒の様相について検討を加える。

第1章 JSTの活動の理念および活動の概要

第1節 活動の理念(目的)

JSTは、註3で言及したいきさつから日本での在住経験もあるカンボジア人のチア・ノル氏が代表をつとめるローカルNGOであり、6つの団体会員(ロータリークラブとNPO)と54名の個人会員がサポーターとなっている(2019年1月現在)。

そのJSTは、5つの理念のもとで活動を展開している。1つめは「共生」である。地域住民と訪問者との協働による活動を促進している。2つめは「継承」である。カンボジア人自らの手による遺跡保存修復の維持が目指されている。3つめは「還元」である。事業

(3) ここで、チア夫妻の経歴に触れておく。

チア・ノル(Chea Nol)氏は、14年間にわたって日本に滞在、大学卒業後に祖国カンボジアに戻り、「日本国政府アンコール遺跡救済チーム: Japan Safeguarding Angkor: JSA」(JSAは、2005年より「シエムリアップ地域とアンコール遺跡の保全と管理のための機構: Authority for the Protection and Management of Angkor and Region of Siem Reap: APSARA」との協同事業となり、「日本国政府アンコール遺跡救済チーム: JAPAN-APSARA Safeguarding Angkor: JASA」として活動)に所属し、通訳・渉外を担う。2005年にJSTを設立してその代表を務めている。

先述のように氏には日本での滞在歴があるが、これにはカンボジアがたどった歴史が深く関わる。氏の少年時代は、ポル・ポト政権、およびその後の内戦期と重なる。ポル・ポトは、極端な共産主義社会の建設を企図し、都市住民を農村に移住させ、家族を解体し、世代ごとに収容所に入れて劣悪な衛生状態と食糧難に置き、ダム工事や灌漑工事などの苛酷な労働を強いた。資本主義を象徴するものとして貨幣を廃止し、学校・病院も閉鎖した。さらに、僧侶・医師・教師といった知識層も資本主義に加盟する存在とみなし処刑の対象とした。氏の父親と2人の兄も医者であったために連行され、二度と会うことはなかった。当時9歳(小学校3年生)であった氏は命こそ奪われなかったが、革命教育を受け、牛飼い、ダム建設の労働を課され、毎日3mの穴を掘り続けた。情報は遮断された上に、世界中のどこも同様の社会体制であると教え込まれていたため、上層部の命令に従ってひたすら働く日々を送った。

その後、ポル・ポト政権が崩壊し、収容所が解体され、3年以上離れていた母親と再会を果たすも、家族を殺した者への復讐の念に駆られていた。そこへ国費留学生として日本に在住する従兄から、こちらに来るようにとの手紙が奇跡的に届く。母との再びの別れなど考えられない氏に日本行きを強く勧めたのは母親であり、氏は2人の従兄と日本へ渡る決意を13歳の時に固める。第三国へ向かうには、タイにある難民キャンプにまず向かう必要があった。氏は、出発に先立ち母親が着衣に縫い付けてくれた金(きん)を案内人に少しずつ差し出し、地雷やポル・ポトの残党との遭遇といった危険にさらされながら、草や昆虫を食糧に、200km以上の道のりを歩き続けた。

苦難の果てにキャンプに到着し渡航証明書を手に入れた氏は、1980年にカンボジアとの国交を一時中断していた日本に難民として受け入れられる。大和市の難民支援センターで3ヶ月間日本語や文化を学び、吉祥寺のカトリック教会の神父に引き取られた。日本語が不自由なために14歳でありながら小学5年生への編入となり、そこから外国人・難民としての差別やイジメにも遭う。しかし、自分の命は過酷な状況生き抜いた命であること、どんなに辛くとも母の想いに応えようと耐え忍び、学費を稼ぎながら大学まで学んだ。

小出陽子氏は、建築デザイナー(一級建築士)であり、「日本国政府アンコール遺跡救済チーム: JSA」のオフィスなどの設計がカンボジアとつながる契機となった。

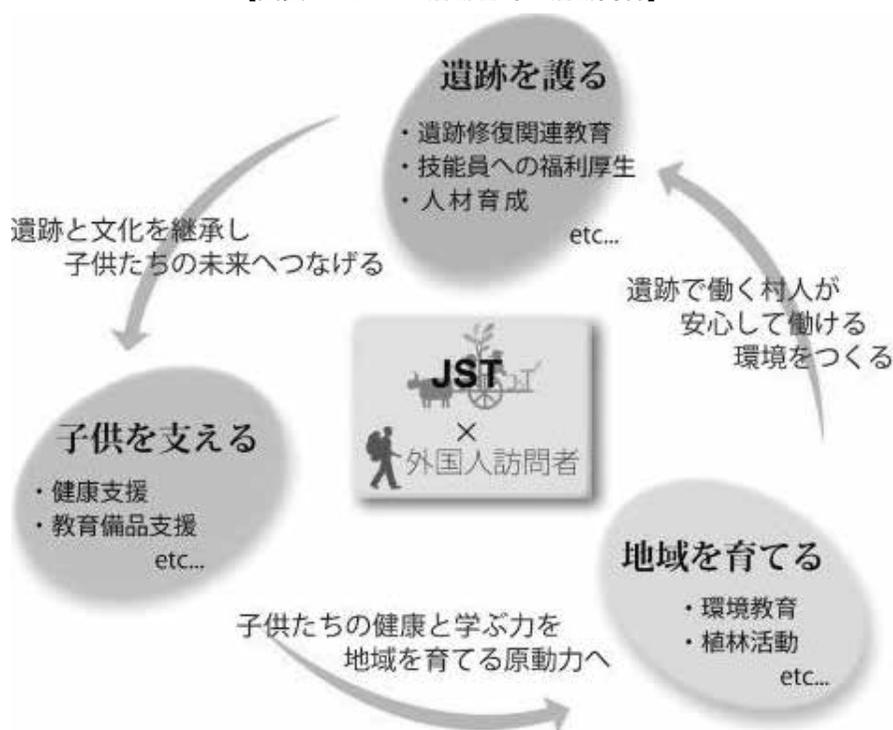
建築の仕事と並行し、JSTのスタッフとしてその運営や、カンボジア料理を観光客に紹介する目的で開いた「Cafe Moi Moi」(Moi Moiとは、クメール語で「ゆっくりゆっくり」の意味)の経営も行っている。

(4) JST ホームページ (<http://jst-cambodia.net/about.html>) (2019年1月7日現在)

による収益金を地域の公共整備・教育支援などに充てることで地域の持続的発展を図っている。4つめは「伝達」である。地域と訪問者、遺跡と農村、観光と地域生活などをつなぎ、カンボジアの魅力を伝えている。5つめは「自立」である。全スタッフへの適正な対価としての給与や各種事業にあたる財源として、収益金の一部を充てている。

【図表 1】⁽⁵⁾は、JST による活動目的と活動内容を図示したものである。

【図表 1：JST の活動目的・活動内容】



上記のように各取り組みを循環的に回すことによって、組織名称ともなっている「アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援」を推し進めている。

第 2 節 活動の概要

JST による活動は、「遺跡保護活動」と「地域支援活動」の 2 本柱から成る。

前者の「遺跡保護活動」がねらいとするのは、カンボジア人による自国の文化遺産の保存修復⁽⁶⁾である。これに絡んだ具体的な取り組みが下記である。

(5) JST ホームページより転載。

(6) ちなみに、アンコール遺跡群の保全は、20 世紀初頭の「フランス極東学院」（フランス政府高等教育研究省が後援）に始まる。

現在、さまざまな国際的組織が保全に携わっており、日本のものでは、(先述した)「日本国政府アンコール遺跡救済チーム：JASA」・「上智大学アジア人材養成研究センター」・「国立奈良文化財研究所」があり、その他、中国・インド・ドイツ・イタリア・アメリカ・オーストラリアなどの組織もある。

- 遺跡修復技術者の養成（遺跡周辺の住民を対象）
- 「遺跡修復講座」・「社会見学会」（子どもが遺跡やその修復・保全について学習）の企画・実施
- 「修復現場ツアー」（遺跡訪問者が遺跡やその修復について学習）の企画・実施
- 「バイヨン・インフォメーション・センター」（アンコール王朝の歴史の概要，当時建立された遺跡群，現在の国際的な修復活動の様子などを展示・紹介する広報施設）・「バイヨン・ハット」（「日本国政府アンコール遺跡救済チーム：JASA」が進めている調査研究の詳細を展示・紹介する広報施設）の設立・運営

後者の「地域支援活動」がねらいとしているのは，カンボジア人の手による文化遺産の保存修復を可能とするのに欠くことのできない地域住民の自立である。その具体的な通り組みは下記である。

- インフラ整備（道路・橋など）
- 「クラウ村コミュニティーセンター」（地域住民や，彼ら住民と訪問者との活動・交流の場）の設立・運営
- 地域の青年の人材育成（将来地域を支える，あるいは学校の教員となる人材の育成を目的として，地域の青年が，近郊の小学校での環境・衛生教育の指導や，野菜の栽培，ナマズ養殖などの体験を主導）
- 子どもたちへの健康支援（「給食プロジェクト」[地域の高校生が中心となって雑炊を調理・提供]など）
- 子どもの学外教育支援（「やまなみフリースクール」での「英語教室」・「日本語教室」・「絵画教室」などの実施，図書館の設立。（これらについては第2章第1節で言及）
- 子どもたちへの学校教育支援（小学校教育の支援 [学校建設⁽⁷⁾，備品支援〈日本の協力者から寄付された教材・PC・ランドセル・文具・ユニフォームなどの中古品の配布〉，環境保護や衛生教育〈地域の青年たちが近郊の小学校を訪問して児童に指導〉，〈児童も参加しての〉植林活動など]
- バイヨン中学校の設立・運営（第2章第2節で言及）

第2章 JSTによる教育支援・地域人材育成の実際

第1節 「やまなみフリースクール」の設立と運営

【写真1】は，2006年開設の「やまなみフリースクール」（「やまなみ塾」とも呼ばれる）を撮影したものである。

“やまなみ”と命名した理由について，「アンコールやまなみファンド：Angkor Yamanami Fund：AYF」（カンボジアの子どもへの教育に関わる物的支援，アンコール遺跡の修復・保全につながる人材育成，カンボジアと日本との草の根レベルでの文化交流などを通じた友好関係の構築を目的とする組織）の発起人の1人である中川武氏は，「ア

(7) これまで，ロータリークラブやNPO組織の寄付により，「アンコール・クラウ小学校」の3棟9教室とトイレ，「モクネアク小学校」の2棟10教室，「コックチャーン小学校」の1棟5教室，「コンボンクディ小学校」の2棟10教室，「スラエン小学校」の1棟2教室，「チョップ小学校」の1教室が建設されている。

【写真1】（筆者撮影）



ンコールの祖先たちは、高いヒマラヤの遙か向こうからこの地にやってきたといわれています。木立に囲まれたこの場所からも青い空が見えます。その向こうに美しい山なみが見えるようになることを願って」と述べている⁽⁸⁾。

このスクールの運営もJSTは担う。AYFからの資金援助を受け、バイヨン中学校の一部の教師が副業の形でここでの指導に携わっている。

やまなみフリースクールがアンコール・クラウ村に設置されたのには、アンコール・トムの北西に隣接する同村から自らの手で遺跡を護る人材を輩出したいとの動機がある。遺跡の周辺には、観光客相手にみやげ物を売ったり物乞いする子どもが少なくなく、そうした学校に行けない・行かない子どもたちへの教育的サポートを図っている。

スクールの主な活動内容としては、①英語のレッスンの開講、②日本の文化（絵本・紙芝居・子どもの遊びなど）や日本語に親しむ機会の創出、③精神的な豊かさの育成（音楽や絵画の鑑賞、植樹、カンボジアの民話やアンコール遺跡への関心を喚起し、クメール文化を誇りに思ったり、自然を大切にすることを養うなど）、④「小さな美術スクール」（邦人の元高校美術教師が指導）⁽⁹⁾の開講、⑤図書の実充、さらに近年は、⑥小学生を対象とする補習も加わっている（月・火曜日は算数、水・木曜日は英語、金・土曜日は国語〔クメール語〕の学習を提供、時間帯は14～16時）。

スクールの創設当初は①に重点が置かれていたそうだが、それは、英語をマスターすることで、アンコール遺跡の保存修復、シムリアップ市内のホテルでの勤務、観光ガイド

(8) 「アンコールやまなみファンド：AYF」ホームページ (<http://www.npo-if.jp/yfund/jp/index.htm>) (2019年1月7日現在)

(9) この「小さな美術スクール」と、ここで指導する邦人の元高校美術教師の笠原智子氏に関しては、『朝日新聞』（2018年6月22日朝刊）の「ひと」欄に取り上げられている。

氏自身も、シムリアップで学校を営んでおり、美術（週6回）・日本語（週4回）を無料で教えているという。

といった将来の職業の選択肢が広がると考えたからであるという。④については、カンボジアの公立小学校には美術や音楽などの芸術系の科目がほぼ設定されていないことが関係している。子どもはクレヨンで絵を描いたり、折り紙や切り絵といった制作に熱中するそうである。

このスクールを日本の教育事業にたとえるなら、「放課後子ども教室」といったところであろうか。

第2節 バイヨン中学校の創設と運営

本節ではバイヨン中学校の創設と運営について述べるが、その前段として、カンボジアの教育制度の概略に触れておく。

同国では、カンボジア王国憲法（1993年9月21日採択、1993年9月24日公布）第68条により、すべての国民に対して無償の初等教育、および前期中等教育の機会を与えることが定められた⁽¹⁰⁾。1996年には6・3・3制を取り入れ、小学校は6年間（6～11歳）、前期中等学校は3年間（日本の中学校に相当）（12～14歳）、後期中等学校は3年間（日本の高等学校に相当）（15～17歳）とした。なお、就学前教育は3年間（3歳～5歳）、大学（高等教育）は4年間（18歳～21歳、ただし、学部によって異なりがある）とされている。しかし、初等教育と前期中等教育の9年間は義務教育と規定されたものの、特に地方では、子どもが労働力として重宝され学校に就学することへの保護者の理解を得られないことや、貧困、あるいは通学が不便などの理由から、修学年限を満了できる割合は低い。出席日数が足りずに留年する子どもも少なくない。

そうしたカンボジアの教育情勢には、この国がたどってきた歴史が色濃く影を落としている。同国は、およそ90年にわたるフランスの支配、1953年に独立を達成したものの、その後の度重なる政権交代や内戦、共産勢力クメール・ルージュの台頭、社会主義政策の導入などにより、教育方針や体制のめまぐるしい変更を余儀なくされた。とりわけ、1975年～1979年までのポル・ポト政権は教育に一切の価値を与えず、教師を含む知識人は政敵とみなしてその多くを虐殺し⁽¹¹⁾、学校や教育施設を閉鎖したために、カンボジアの教育は壊滅状態に追い込まれた。さらに、ポル・ポト政権以後も打ち続く内戦が依然困難な道のりを強いた。各国の支援⁽¹²⁾を受けながら復興に向けた歩を進めているものの、教育インフラやシステムの不備、教師不足など負の歴史的経緯が現在まで尾を引いている。学校教育が午前/午後の2部制（3部制も存在）なのはその1例である。

カリキュラムに関してであるが、義務教育段階においては、国語・書き方・作文・算数・歴史・理科などが中心であり、美術・音楽・体育はほとんど行われない。中学校から外国語教育が加わり英語か仏語を選択する。課外活動・生徒会活動についてもそれほど活発で

(10) 義務教育段階は原則無料であるが、制服や学用品などの諸経費はその対象でない。

(11) 1975年当時には21,000人いた学校の教師は、ポル・ポト政権下での教師殺害で、1979年には3,000人にまで激減した。

教育が再開された折には、絶対的に足りない教師をカバーするために、読み書きができる者を学歴不問で学校の教師として政府が指名・採用する「指名教員」の策でしのいだ。

（コン・エン 著『カンボジアの教育制度と進路形成意識——初等・中等教育の現場から——』昭和堂、2018年、137ページ）。

はない。後期中等教育段階のカリキュラムについては、必修科目は国語・英語（もしくはフランス語）・歴史・数学・生物・化学などであり、選択科目は体育・芸術・工作・裁縫・農業などがあるが、設備や機材が足りず十分な教科指導ができていないのが実状である⁽¹³⁾。

(1) バイヨン中学校創設の経緯

【写真2】は「バイヨン中学校」を撮影したものである。中央奥には、同校の設立者チア夫妻の出身国であるカンボジア・日本両国の旗が掲げられている。校名はアンコール時代の都バイヨン（Bayon）に由来する。

同中学の創設の契機は、夫妻が「アンコール・クラウ小学校」に教室を増設した際に、

【写真2】（筆者撮影）



(12) カンボジアの復興に向けては、日本も内戦時代から深く関わってきた。

1980年前後に、大勢の難民がタイなどに逃れた際には、曹洞宗ボランティア会（現「シャンティ国際ボランティア会」）、「日本国際ボランティアセンター：Japan International Volunteer Center：JVC」などの国際NGOが組織され難民支援を行った。

1990年には、日本政府はカンボジアの政治勢力を集めて和平に向けた国際会議を東京で主催し、翌1991年のパリ協定で和平が実現すると、1992年にPKOに初めて自衛隊や警察官らを派遣した。

その後の復興において、円借款を含む日本政府の援助額は、1992年～2016年までで累計約27億ドル（約3千億円）にのぼり、2010年に年間の額で中国に抜かれるまでは一貫して最大の援助国であった。

加えて、民間のNGOも地雷除去や学校建設などの支援を続けてきた。

ポル・ポト政権時代に知識人が虐殺され人材不足が危機的状況の中、法律家らは法整備の支援を行った。

また、虐殺に関わったポル・ポト政権幹部を裁くため、国連とカンボジア政府が設けた特別法廷にも政府は資金協力をした。

2001年と2015年には、日本の支援で2つの大型橋が完成し、「きずな橋」「つばさ橋」と命名され、これらはカンボジア紙幣の図柄になっている。

(13) なお、放課後に不十分な学習時間を補ったり卒業試験に備えて民間の学習塾に通ったり、通学している学校の先生が有料で補習するといったケースも見られる。

卒業試験とは、各学校の最終学年時に課されている試験であり、卒業判定と進学に必要な修了資格の認定を兼ねている。

子どもや村民から多数寄せられた、次は中学校を作ってほしいとの要望であったという。当時、周辺の5つの村には中学校が存在せず、これらの村の小学校の卒業生は、近い者でも片道約4km 遠い者であれば15km ほどをかけてシェムリアップ市内の中学へ通学しなければならなかった。雨季には通学自体が困難になることも重なり、中学への進学率は小学校卒業生の約15%にすぎなかった。この地域に限らず、カンボジアでは(先述のように)子どもは労働力とみなされているので、小学生段階でやむなく中途退学したために読み書きのできない子どももめずらしくない。カンボジアの未来に向けて農村地域の教育状況を改善しなければならないと常々考えていた夫妻は、早速建設用地を探し始めたが、適当な土地が見つからなかったために3ヘクタールの私有地を国に譲り渡すことを決めた。小出氏は当時の心境を、「迷いがなかったといえば嘘になりますが、3学年で1200人以上いるはずの5つの村の子どもたち全員が通える中学校を創設することが、最も有意義な土地の使い方だと判断しました。校舎建設費の大口寄付者が現れたことも決断を後押ししました」⁽¹⁴⁾と回想している。

中学の設立に際して夫妻が配慮したのは、地域住民に「学校」や「教育」に関心を持ってもらうことであったという⁽¹⁵⁾。そのための手立てとして、大人には外周柵の製作、子どもには校庭の植樹を任せることで学校建設のプロセスに住民を巻き込んだり、村の子どもの教育実態について説明するワークショップを開くなどした。こうした地道な働きかけが功を奏し、住民からの提案によってカンボジアの伝統的な募金祭「ボン・ブカーブラッ」での資金集めや敷地の草刈りが行われるなど、地域がまとまって中学建設を後押しする機運が高まっていく。そして、小出氏が設計を手がけたバイヨン中学校が完成した。

(2) バイヨン中学校の概要

【図表2】は、バイヨン中学校の開校(2013年)から現在(2019年)までの生徒数の推移を示したものである⁽¹⁶⁾。

同中学には、学区内の5つの小学校の卒業生のほぼ全員が、11月1日に毎年入学してくる。さまざまな理由で中退した生徒(この辺りについては同節[3]で言及)が復学する事情から、

【図表2：バイヨン中学校生徒数】

2013～2014年	2014～2015年	2015～2016年	2016～2017年	2017～2018年	2018～2019年
1年：135名 (男子：65名 女子：70名)	1年：167名 (男子：70名 女子：97名)	1年：185名 (男子：76名 女子：109名)	1年：158名 (男子：70名 女子：88名)	1年：194名 (男子：105名 女子：89名)	1年：207名 (男子：109名 女子：98名)
	2年：130名 (男子：60名 女子：70名)	2年：158名 (男子：62名 女子：96名)	2年：168名 (男子：63名 女子：105名)	2年：147名 (男子：62名 女子：85名)	2年：173名 (男子：89名 女子：84名)
		3年：117名 (男子：54名 女子：63名)	3年：148名 (男子：60名 女子：88名)	3年：163名 (男子：61名 女子：102名)	3年：136名 (男子：55名 女子：81名)
計：135名	計：297名	計：460名	計：474名	計：504名	計：516名

(14) 小出「シェムリアップ Moi Moi ライフ」『Nyo Nyum』2013年8月号。

(15) 小出前掲記事、2013年12月号。

(16) バイヨン中学校の校長室の黒板に記載されている数値に基づき作成。

年齢には13～18歳までの幅が見られる。ちなみに、かつての日本も含め、男子の方が就学率が高い傾向が指摘されるところだが、バイヨン中学では女子の在籍率が男子を上回っている点が注目される。「教育・青年・スポーツ省：Ministry of Education, Youth and Sport：MoEYS」の統計（2017年）によると、中学1年生の入学者数は、シェムリアップで計18,505人（男子：8,839人、女子：9,666人）であり、カンボジア全体では計238,892人（男子：116,259人、女子：122,633人）である。中学2年生の入学者数は、シェムリアップで計13,686人（男子：6,031人、女子：7,655人）であり、カンボジア全体では計189,748人（男子：89,881人、女子：99,867人）である。中学3年生の入学者数は、シェムリアップで計11,555人（男子：5,112人、女子：6,443人）であり、カンボジア全体では計157,402人（男子：76,248人、女子：81,154人）となっている⁽¹⁷⁾。ユネスコの統計（2017年）では、カンボジアの前期中等教育段階の就学率（純就学率）は、51.96%（男子：47.99%、女子：55.96%）である⁽¹⁸⁾。これらのデータからも女子の数値が男子のそれよりも多いことを確認できる。なお、この点について、小出氏は、カンボジアの男子の労働力に依存する家計のあり方が起因しているのではないかとコメントしている。男子は力仕事ができ、職種も多いため、多くが近郊の都市やタイ・ベトナムといった周辺の国に出稼ぎに出ることで就学の機会が阻まれるという。

【図表3】は、バイヨン中学の時間割である。図表中の7の数字は1年生、8は2年生、

【図表3：バイヨン中学校時間割】

（上2つは2・3年生を対象とした1部の時間割、下2つが1年生を対象とした2部の時間割）

時間	月曜日									火曜日									水曜日												
	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C	
7:00-8:00	体育				生物	クメール語	公民	クメール語	数学	英語	体育				化学	公民	地理	英語	クメール語	数学	体育				クメール語	化学	クメール語	数学	公民	数学	英語
8:00-9:00	体育				生物	クメール語	数学	クメール語	数学	英語	体育				数学	地理	公民	英語	クメール語	数学	クメール語										
9:00-1:00					英語	公民	数学	生物	化学	クメール語					数学	英語	化学	公民	地理	クメール語											
10:00-11:00					公民	数学	クメール語	英語	生物	クメール語					家庭科	数学	物理	クメール語	英語	公民	クメール語										
11:00-12:00					公民	数学	クメール語	英語	生物	クメール語					家庭科	数学	物理	クメール語	英語	公民	クメール語										

時間	木曜日									金曜日									土曜日												
	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C	
7:00-8:00					地理	生物	クメール語	物理	クメール語	数学					体育			生物	クメール語	数学	物理	クメール語	英語	化学	地球学	歴史	数学				
8:00-9:00					数学	生物	クメール語	地理	クメール語	数学					体育	英語	家庭科	生物	クメール語	数学	物理	クメール語	英語	家庭科	家庭科	歴史	数学				
9:00-1:00					数学	クメール語		数学	地理	家庭科					英語	地球学	歴史	数学	化学	クメール語											
10:00-11:00					クメール語	クメール語	数学	数学	物理	家庭科					家庭科	数学	英語	数学	地球学	クメール語											
11:00-12:00					クメール語		数学	生物	物理	家庭科					地球学	数学	英語	物理	クメール語												

時間	月曜日									火曜日									水曜日											
	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C
12:00-13:00	数学	公民	英語								数学	化学	地理	クメール語							数学	英語	数学	生物				体育		
13:00-14:00	地理	クメール語	数学	歴史	体育						クメール語	数学	クメール語	地理							英語	クメール語	数学	生物				体育		
14:00-15:00	クメール語	歴史	クメール語	数学							クメール語	数学	クメール語	英語							英語	クメール語	数学	英語				体育		
15:00-16:00	クメール語										クメール語	数学	クメール語	英語							クメール語	数学	クメール語	物理						体育
16:00-17:00	クメール語	歴史	クメール語	数学							化学	地理	数学	英語							クメール語	数学	クメール語	物理						体育

時間	木曜日									金曜日									土曜日											
	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C	7A	7B	7C	7D	8A	8B	8C	9A	9B	9C
12:00-13:00	数学	公民	化学								地球学	クメール語	生物	数学							生物	物理	地球学							
13:00-14:00	物理	英語	公民	数学							英語	クメール語	生物	数学							生物	物理	地球学							
14:00-15:00	物理	英語	歴史	数学											英語	歴史	家庭科				歴史	生物								
15:00-16:00	公民	数学	物理	クメール語							家庭科	公民	数学	クメール語							歴史	生物	公民	公民						
16:00-17:00	公民	数学	物理	クメール語							家庭科	数学	クメール語								地球学	家庭科	化学							

(17) Youth and Sports (MoEYS) (2017) *Education Statistics and Indicators 2016-2017*, Phnom Penh: MoEYS, p. 27. (<https://drive.google.com/file/d/0B1ekqZE5ZIUJWdPLWx4MkZFOxc/view>) (2019年1月7日現在)

(18) UNESCO Institute for Statistics : UIS. Stat (<http://data.uis.unesco.org/Index.aspx>) (2019年1月7日現在)

9は3年生であり、アルファベットA～Dはクラスである。同中学が提供するカリキュラムは教育省が推奨する内容に準じているといい、全学年において国語・英語・歴史・地理・公民・数学・物理・化学・生物・地球学・体育・家庭科・農業（時間割の教科の位置づけにはないが、学校菜園の世話などを行う）が組み込まれている。

同中学でも2017年度から午前/午後の2部制を採用しており、午前の1部(7時～12時、50分授業で5コマ、授業時間とコマ数は2部も同様)に2・3年生、午後の2部(12時～17時)に1年生が出席している。表中に黒ぬりの箇所が見られるのはそのためである。

(3) バイヨン中学校の特色と課題

バイヨン中学校の特色の1つめとしては、チョム・ルー (Chhom Reu) 校長の経営手腕が挙げられる。バイヨン中学の学校長の選定に際して、チア夫妻は、勤勉であることを市の教育長に条件として提示したそうだが、チョム・ルー校長はその期待を裏切ることなく熱意と気配りと目配りをもって学校の管理運営に日々奔走しているという。校長による実践の中でも特筆したいのは、時間管理の徹底、および学校に対する理解の促進である。カンボジアでは時計や暦が日用のアイテムではないので、これらを確認する習慣もそれらの見方を習う機会もなく、時間に対する感覚や意識が希薄であるという。そこで、校長は、時間割に沿った規則正しい学校生活の実現に尽力している。学校に対する理解の促進に絡んだ取り組みとしては、保護者会を開いたり、運動会(後述)などの行事を通じて学校教育の重要性を訴えることがある。このような手だてをとるのは、保護者の識字率がおおよそ10%という状況下において文書での通知が意味をなさないことがある。他にも、これら取り組みには生徒の退学に歯止めをかける意図もある。保護者の世代は小学校すら卒業していない場合が少なくなく、それでも支障をきたさず生活ができてしまうために子どもが学校で学ぶことに価値を見出しにくいとのことで、保護者に就学の必要性を認識してもらうねらいがある。

なお、校長自身が心がけていることには、①子どもや他の教師の見本となるように率先して行動する、②他の教師に一方的に指示するのではなく、彼らの意見をくみ取る、③運営資金までも含めた情報共有や情報交換に努める、があるという。それは、他の教師から理解してもらうことで彼らからの協力も得られ、円滑な学校運営につながるとの考えからだという。これと同様の趣旨から、④保護者会をひんばんに開いて話し合いの場を持ったり、問題のある生徒の家庭訪問を行ったり、運動会や文化祭などのイベントで子どもたちの学校生活の様子を参観してもらう機会を設けるなど、保護者へのていねいな対応も挙げている。また、⑤JSTや他の団体からの訪問や視察のすべてに応じることとし、そのための受け入れ体制を整えていることも挙げている。訪問や視察がさらなる支援獲得につながることを願ってのことだという。さらに、⑥村長や集落長など地元の行政関係者や、州や市の教育長といった教育に関連する役人とも良好な関係を維持すべく、JST代表のチア・ノル氏とともに定期的に挨拶に出向いたり、懇談をしたり、運動会や文化祭への参列・協力を依頼することも挙げている。

特色の2つめに、地域や自国の文化にちなんだ学習を重んじていることがある。【写真3】のような特設教室が用意され、伝統的な生活道具やこうした道具の解説資料が展示されている。この解説資料は、クメール語・日本語・英語の併記となっている。

【写真3】（筆者撮影）



遺跡や環境保全に関わる学びも提供しており、2018年9月には長期休暇の期間（9月1日～10月31日）を利用した集中授業形式の「文化財教室」（計11回）が実施された。約60名の生徒が、世界遺産、および文化財を学ぶ上で必要な神話・物語、伝説などについて、「青年文化財センター」のスタッフからレクチャーを受け、その後、パパーオン寺院、バイヨン寺院、アンコール・ワットなどの7つの遺跡を実地に見学している。企画者はチョム・ルー校長であるが、氏がこのようなアイデアを思い立ったのには、カンボジアは文化財が豊富で、観光は国を支える産業であるにもかかわらず、バイヨン中学の生徒を含めたカンボジアの子どもはそれら自国の文化に触れるチャンスに恵まれない実状がある。

特色の3つめとして、国際交流や異文化理解に力を入れていることが挙げられる。先述の3か国併記の展示物というのも異文化理解を促す一教材であるが、その他として、日本のNPO法人「社会に教育を普及する団体：Organization Anti-illiteracy Spreading Into Society：OASIS」（途上国の人々の目線に立ち、助け合い教え合いながら互いに成長していく人間環境作りを主目的とするNPO法人）などのサポートのもとで運動会の行事も取り入れている。2018年1月の3回目の運動会では、保護者が午前3時からボランティアで作ったお粥を、午前5時に登校した子どもたちが食べてお腹を満たし（子どもたちの食事情については第3章第2節で言及）、その後、入場行進、ラジオ体操、伝統舞踊のココナツダンス、カンボジア風にアレンジされた玉入れやリレーなどに興じたそうである。運動会の準備段階から本番まで生徒主導を基本方針にしていることから、入場行進の選曲や当日の進行も生徒が担う。また、こうした運動会の意義や面白さを外部に発信したいとのことで、チョム・ルー校長は、他校の校長や教育局の役人を多数招いている。生徒はもちろん地域住民にとっても運動会は心待ちのイベントで、会を盛り上げる協力を惜しまないという¹⁹⁾。加えて、2018年5月には初の文化祭が開催された。これも校長の発案である。2016年の日本での研修において学校の文化祭を参観して着想を得たそうだが、バイヨン中学の文化祭では地域や自国の文化を題材にその継承につながるようなコンテンツを提供

したいと考えたという。そうした校長の意向から、土着信仰・儀式的紹介、伝統的な手工品(手編みゴザなど)製作の紹介、芸能披露といった催しがなされ、クラスごとの出店(カンボジア料理・お菓子・野菜・民芸品などの販売)や歌合戦も行われた。なお、宗教的儀式と信仰の紹介は僧侶が担い、伝統的な手工品製作の紹介、芸能披露、歌合戦については近隣の住民が参加するというように、地域ぐるみの大行事となっているところにバイヨン中学らしさがうかがえる。

特色の4つめに、生徒が主体的なスタンスで取り組むことのできる学びや活動が充実していることがある。先の運動会や文化祭においても生徒の自主性は尊重されているが、さらなる事例として【写真4】のハーブティーセットの販売⁽²⁰⁾を示したい。

【写真4】(筆者撮影)



同セットは、バイヨン中学校運動会当日に売り出されたが、そこまでの一連の工程——校内の菜園でのハーブの栽培・収穫・乾燥、セットに同梱する絵はがきの作成、それらの箱詰め——を生徒が主に手がけている。なお、この収入は、学校の運営資金という形で生徒や彼らが使用する施設へと還元される。この試みにあって、生徒は、単に支援にあずかるのではなく、支援を引き出す側に回っている。「支援慣れ」なる言葉も聞かれるなかで、自らの地域やその行く末を自分事として引き受けられる人材育成の手法を整えていくことは、バイヨン中学のみならずカンボジア全体で引き受けなくてはならない課題であろうが、ハーブティーセットの販売というのは、ささやかでありながら1つの有効なアプローチで

(19) 運動会の様子は、JSTのホームページで視聴できる。

この運動会を通して集団競技の面白さを体感した生徒たちは、サッカーチームを結成して州の大会にも出場している。

筆者の訪問日にも、放課後に裸足でボールを追って校庭を駆け回る生徒の姿が見られた。

(20) 1箱10ドルで計100箱を販売。

セットには、写真右下の絵はがきを書いた生徒の顔写真入りのカードも含まれているが、これについては肖像権・個人情報保護の観点から掲載を控えた。

あると思われる。

特色の5つめとして、生徒たちが学校生活を存分に楽しんでいることが挙げられる。その理由には、先ほど指摘したように、彼らが主体性を持って学びや活動に臨める環境にあること、また、(日本の生徒たちのように)周囲に娯楽があふれているわけでも、おけいごとや塾通いが一般的でもないことが考えられる。生徒たちは学校に対して親和的かつ意欲的である。彼らは、休日であろうとバイヨン中学を遊び場とするほど学校に愛着を抱いているので、学校側もこれに応えるべく、長期休暇の期間も清掃(校舎の掃除・校庭の整備・植栽の世話・草取り)、補習、研修旅行などのアクティビティを用意する⁽²¹⁾。2018年には3種類の補習を用意している。「補習授業1」は、新3年生全員を対象として、月曜日～土曜日の午後2時～4時に、数学・国語・英語の基礎的内容をバイヨン中学の教員が無料で指導するものである。「補習授業2」は、新3年生の一部を対象に、日曜日の午前中に、数学・国語の発展的な内容を教科ごと5ドルの月謝を徴収してバイヨン中学教員が指導するものである。「補習授業3」は、新2～3年生を対象として、土曜日と日曜日の午前中に、数学・国語・PCを新3年生と卒業生が無料で指導する形態をとっている。2018年の長期休暇中には「電気技術教室」も実施された。これもチョム・ルー校長によって考案された特別授業であるが、それには、2017年5月にバイヨン中学周辺に電気が通ったことが関係する。今後は、電気に係る職が増えていくとの見立てから、電気についての知識や技術を生徒に習得させることをねらっている。また、こうした学習の機会が、高校に通いながら電気に絡んだ仕事に従事して大学進学資金を蓄えるという形で将来の生徒の選択肢の幅になることも見込んでおり、その意味ではキャリア教育といえるものである。さらには、生徒・教員・保護者・卒業生など総勢250名ほどが5台のバスで、フランス植民地以前から栄えていたバタンバン州の博物館・バナナ遺跡・ブドウ畑などを巡る「バタンバン研修旅行」も実施された(1人8ドルの参加費を徴収)。バイヨン中学の生徒やその保護者は、自らが住んでいる村やシェムリアップ以外の場所を訪れた経験がないことが多いそうで盛況であったという。

次にバイヨン中学校の課題について指摘したい。

課題の1つめに、同中学に限ることではないが、経済的な資金の問題がある。国から支給される額は生徒1人あたり1.5ドルということで、他の財源を確保しなければ学校運営はうまく回らない。そこで、バイヨン中学には、日本をはじめとする支援者からの寄付金、JSTの会員費、JST企画のツアーからの収益などが充当されている。ちなみに、2016年度にJSTから同中学に投入された額は8000ドル——内訳は、学校整備費(作業員2名分の給与を含む):3000ドル、教師の交通費:2000ドル、伝統音楽授業の講師代:850ドル、JSTスタッフによる音楽・美術・日本語・環境授業の際の交通費:620ドル、サッカー試合参加交通費:380ドル、プリンター修理代:380ドル、防犯費(格子設置):300ドル、ミシンを用いた授業の材料費:180ドル、支援品コンテナ受け入れ関税代:150ドル、備

(21) 長期休暇中でも学校がアクティビティを提供するには、生徒の非行を未然に防ぐ側面もある。町の不良少年に誘われて麻薬などに手を染めてしまうといったケースは農村部にも広がりつつあり、バイヨン中学の生徒にとっても無縁ではない。長期休暇の時期は家業の手伝いが比較的少ないこともあるので、生徒を登校させることで彼らの様子を把握し、問題行動に走らぬよう配慮するのだという。

品(机・椅子)修理費:140ドル——であった。

課題の2つめとして、人的な面、教師をめぐる問題がある。この点について指摘をする前段として、バイヨン中学校の常勤教員に関わる情報(2019年1月現在)を【図表4】にまずは示す。

【図表4：バイヨン中学校常勤教員情報一覧】

No	属性	最終学歴	担当職務または担当教科	在職期間	備考
1	48歳・男性	教員養成センター	校長	2013年～	
2	30歳・女性	教員養成センター	英語・クメール語	2016年～	
3	28歳・女性	教員養成センター	クメール語・道徳	2014年～	副業としてやまなみフリースクールでクメール語を指導
4	23歳・女性	教員養成センター	クメール語	2016年～	
5	24歳・女性	教員養成センター	数学	2015年～	副業としてやまなみフリースクールで数学を指導
6	30歳・男性	教員養成センター + University of Law and Economics	生物・地球学	2015年～	
7	27歳・女性	教員養成センター	歴史・地理	2016年～	
8	27歳・男性	教員養成センター + Pannasastra University	英語	2014年～	副業としてやまなみフリースクールで英語を指導
9	24歳・男性	教員養成センター	体育	2015年～	
10	38歳・女性	教員養成センター	物理・化学	2016年～	
11	29歳・女性	教員養成センター	英語・クメール語	2017年～	
12	31歳・女性	教員養成センター	クメール語・道徳	2017年～	子ども同伴で勤務
13	34歳・女性	教員養成センター	司書	2018年～	子ども同伴で勤務

その他に、非常勤の教員も2名(38歳・男性で数学を担当, 28歳・男性で英語を担当)在籍している。一覧から、年齢層は20～30代, 男女比では女性が多数を占めていることが確認できる。また、担当教科を一瞥すると、先述した時間割の全科目の専科教員がそろっていないことになるが、各教員が教えられる科目を引き受けることでカバーしているという。

なお、図表中の「教員養成センター」に関して補足すると、前期中等教育の教師の場合、高等学校卒業後に2年間「地域教員養成センター: Regional Teacher Training Center: RTTC」において養成教育を受けることとされている。

では、バイヨン中学での教師に絡んだ具体的な課題を挙げるが、これには、生徒数の増加や2部制の導入に伴う職務の負担拡大、そして、待遇面の問題がある。これらもカンボジアの教師全般に違わず該当するところである。国から支給される給与は一律で、交通費などの補助はない。そこで、バイヨン中学では毎月の教師の交通費を補てんしている。平均給与は250ドル（校長は300ドル）と高額でないため、教師の中には家庭教師などの副業をしている者もいる⁽²²⁾。カンボジアの学校では2部制がめずらしくないことを先に述べたが、これは労働条件の不備ゆえに町から離れた学校に赴任することを教師たちが敬遠し、農村部の教師が不足しがちになることへの苦肉の策でもある⁽²³⁾。バイヨン中学でも、2部制による教師の業務内容の拡大や、生徒数の増加に見合う教師の増員の難しさといったことが、負担感や負荷を教師に生じさせている可能性はある。加えて、教師の士気の問題もある。教師のモラルの低さに関してもカンボジアの教師全体のこととして取りざたされる。既述のように時間感覚が希薄であることから時間にルーズであるとか、なかには自分の用事を優先するため生徒に自習をさせてしまうようなケースも見られるそうである。ただ、チョム・ルー校長によると、昨今のバイヨン中学にあっては、先に述べた長期休業の期間に補習や行事を実施していることからもうかがえるように、教員の士気に向上の兆しが認められるという。本来は休業である時期にこれらのことを行うには教師の理解や協力が不可欠である。2~3年前のバイヨン中学であれば想像できなかった変化であり、公立の学校では考えられないことだという。また、教師が生徒に親身に向き合っていることから双方の結びつきも深いものになっているという。

課題の3つめに、中途退学の問題がある。これもバイヨン中学だけのことでない。先述のように、子どもは家事労働の重要な支え手であるから、農作業・薪割り・家畜の世話・弟妹のお守、あるいはこの地域ならではの遺跡付近での物品販売などに駆り出されることで結果的に学校から足が遠のく。バイヨン中学でも、卒業生では、第1期生：18名（男子：11名、女子：7名）、第2期生：19名（男子：10名、女子：9名）、第3期生：22名（男子：15名、女子：7名）、在校生に関しては、現3年生：22名（男子：15名、女子：7名）、現2年生：21名（男子：16名、女子：5名）がドロップアウトしている（2019年1月現在）⁽²⁴⁾。なお、バイヨン中学では、中途退学の軽減を図るべく、学校を欠席がちな生徒を対象に家庭訪問を随時行っている。

課題の4つめとして、近隣に高校がないために高校進学が閉ざされてしまう問題もある。チョム・ルー校長の推測では、バイヨン中学卒業生で高校に進学した者のうち高校1年終了時におよそ半数が退学しているといい、その原因には通学距離の長さ（シェムリアップには高校が2校のみであり、生徒によっては自転車で片道1時間以上になる）、学資の不足（バイク通学をするためのガソリン代などのもろもろの経費を工面できない）、保護者

(22) 筆者の訪問時にガイドをつとめてくれたJSTのスタッフの兄弟は高校教師をしていて、週末には露店でグリルチキンを販売しているとのことであった。

(23) 国からの資金が乏しく学校建設が不十分であることも、2部制を取らざる得ない一因となっている。

(24) 過去には、ある女子生徒の保護者が、家庭の窮乏から娘を結婚させたいとの理由で中退を願い出てきたケースもあるという（校長の説得によって中学卒業まで結婚を延期してもらうことができた）。

ちなみに、バイヨン中学の学区にある5つの小学校でも留年や中退者が多い。いずれの学校も6年生まで進級できる児童は約半分、中退者も半数にのぼる。

の無理解（学業より働いて家計を支えてほしい）などが考えられるという。そこで、校長やチア夫妻は、バイオン中学に併設する形態での「バイオン高等学校」の設立を将来的な視野に入れている。バイオン中学校は、周辺5つの村の中央に位置しているため、生徒たちは片道1時間もかからず通学することが可能で立地として好条件であるし、同校には家庭訪問や保護者会などで築いてきた保護者との信頼関係もあるので彼らからの支持を取り付けやすいとの目算もある。ただし、高等学校の併設には教師の確保という難題が立ち上がる。先述のような労働環境や待遇にあってこれを打開するのはたやすいことではない。

第3章 JSTの教育支援・地域人材育成をめぐる背景

——バイオン中学校の生徒の様相——

第1節 バイオン中学校の生徒の家庭環境および経済状況

アンコール・ワットという世界的に名高い観光資源を誇るアンコール・クラウ村に位置するバイオン中学であるが、生徒の家庭は、一世帯あたり6～7人が1ヶ月100ドルほどの小規模農業で生計を立てているのが平均的であるという⁽²⁵⁾。自宅の周囲にマンゴーや椰子などの木を植え、鶏や豚を飼って自給自足の暮らしを営む。温暖な気候ゆえに、果樹を植えれば特段世話をしなくても時季が来れば収穫の恩恵にあずかれる。

2017年に村に電気が供給されるようになったものの、水道はいまだ通っていない。日々利用する井戸水はごみが浮いて不衛生で、鉄分の含有率も高いため、長年飲み続けて尿道結石を招くおそれもあるという。家庭によっては、簡易的な濾過装置をつけたり、周辺の浄化された井戸から汲んだ水の利用ができる。

カンボジアの基幹産業は農業だが、流通経路が未整備なために都市部で消費される農産物の大半は隣国からの輸入品で現金収入を得ることは難しく、生活レベルは相対的に楽ではない。その上にさらなる格差がある。それは家の造りでも判別できるという。【写真5】は、やまなみフリースクール近くに建つ家屋である。このようなトタンの屋根や草ぶき屋根の家の生活は厳しく、瓦屋根の家は経済的にいくぶんゆとりのある家であるという。

バイオン中学校の生徒の経済状況を理解する手がかりとしてここで引用したいのは、JSTによる同校生徒のアルバイトに関わる調査である。同調査の実施に至った動機には、第2章第2節で言及したように、家庭の経済難を理由に中学をドロップアウトせざるを得ない生徒が一定数いることから、彼ら生徒の生活状況を把握したいとの意向があったという。また、18歳未満の児童労働は表向きでは禁じられているが、彼らの稼ぎがなければ家計が苦しい経済状況のもとに生徒が置かれているのではないかと予測もあった。

本稿の最後に提示している【別表】は、同調査に応じた計61名の生徒のアルバイト状況の一覧である⁽²⁶⁾。ここから読み取れることとして、アルバイト開始時期については、

(25) その他の収入を得る手段としては、遺跡修復作業、遺跡エリアの清掃、遺跡エリアや村における屋台での販売、建設現場作業、ホテル・レストランなどの観光産業に係る業務などがある。

(26) この一覧表は、JSTにボランティアとして関与している関西学院大学生が作成したものにもとづいているが、個人情報に関わる部分の削除や表現の変更などの加工を筆者が行っている。空白部は不明であることを意味する。

【写真5】（筆者撮影）



中学校入学以前と以後が半々であること、仕事内容は、アンコール・ワットという観光エリアに絡んで、その周辺での土産物の製造・販売や飲食業が圧倒的な数にのぼることである。1週間の勤務の割合としては、学校が休みの日曜日のみがかなり多い一方で、毎日アルバイトをしている生徒も14名を数える。アルバイト収入は、2万～2万5千リエルが23名と最多である。1リエルは0.03円弱に相当するので、20,000リエルは約540円、25,000リエルは約680円である。その用途としては（複数回答可）、親に渡すと答えている生徒が42名と圧倒的である。学校で必要なものを購入する費用に充てている生徒は29名である。学校の裏の売店で食料品の購入に使うと答えている生徒は22名である。ちなみに、この売店で販売されているお弁当は1,500リエル、軽食は500～1,000リエル、飲料は500～2,500リエルであるという。通学にかかる経費をアルバイト代から捻出している生徒がいること、上記のようなアルバイトで得る平均的金額からすれば、売店で食料品を日常的に購入することが簡単ではないこともうかがい知れる。

第2節 バイヨン中学校の生徒の身体の発育状況

バイヨン中学校の生徒の身体の発育状況を把握する上で有効なデータとしては、前出の「社会に教育を普及する団体：OASIS」の協力で2018年に実施された健康診断の結果がある。日本の学校教育では、「学校保健安全法」によって全学年に対して毎年健康診断の実施が義務づけられているが、カンボジアではそのような規定がないため検診はほぼ行われていない。が、バイヨン中学では、生徒の身体の発育状態に配慮した教育を提供することを意図して、1年生の体調・身長・視力・血圧・脈拍・聴診の検査をスタートさせている。

【図表5】・【図表6】はその男女別の数値である⁽²⁷⁾。項目としては、（中学1年生の括り

(27) 「JST だより vol. 2」(2018年3月) 記載のデータに、筆者が若干の加工を加えている。

「JST だより」とは、インターネットを介してJSTの会員に発信される同組織の活動状況に関する広報誌である。

でも異年齢の生徒が在籍するために) 各年齢の人数, 身長・体重・視力それぞれの平均・最小値・最大値, ローレル指数 (Rohrer index, 学童用の BMI であり, 計算式は体重[kg] ÷ 身長[cm]³ × 107), さらには, 家庭が所有する家畜の数や収入を判断基準に各村の村長が指定する「貧困家庭」の生徒数についても示されている。

【図表5：バイヨン中学校1年生男子身体測定結果 (測定日：2018年1月18～19日)】

年齢	人数	身長 (cm)			体重 (kg)			右視力			左視力			ローレル指数	貧困 家庭数
		平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均	
11	11	136.0	127.0	143.0	28.8	25.9	33.4	1.5	1.2	2.0	1.7	1.2	2.0	114.7	2
12	29	143.4	124.0	163.2	34.6	23.3	50.9	1.5	0.7	2.0	1.5	0.9	2.0	116.0	3
13	27	144.3	126.6	163.6	34.9	22.1	50.9	1.6	0.7	2.0	1.6	0.5	2.0	114.6	2
14	18	148.6	128.1	163.0	37.5	28.3	46.9	1.7	1.0	2.0	1.6	1.2	2.0	114.0	4
15	7	161.3	150.1	171.3	48.3	39.5	53.9	1.7	1.0	2.0	1.8	1.2	2.0	115.1	0
16	11	159.2	143.0	169.2	45.8	29.7	57.8	1.9	1.5	2.0	1.7	1.0	2.0	112.3	2
17	3	160.5	159.9	161.0	49.4	48.2	50.6	1.8	1.5	2.0	1.0	0.8	1.2	119.6	0
合計	106														13

【図表6：バイヨン中学校1年生女子身体測定結果 (測定日：同上)】

年齢	人数	身長 (cm)			体重 (kg)			右視力			左視力			ローレル指数	貧困 家庭数
		平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均	最小	最大	平均	
11	7	138.2	130.0	145.3	32.0	26.0	41.7	1.6	1.0	2.0	1.6	0.9	2.0	120.4	1
12	39	144.9	126.0	164.0	35.3	22.5	47.6	1.6	1.0	2.0	1.7	1.2	2.0	115.8	3
13	20	147.5	131.0	158.2	38.9	24.4	52.6	1.7	1.0	2.0	1.7	1.0	2.0	120.6	6
14	15	147.4	119.5	157.0	40.8	19.3	51.6	1.6	1.0	2.0	1.6	1.0	2.0	125.7	3
15	3	151.5	143.0	158.0	45.3	42.7	47.8	1.5	1.5	1.5	1.8	1.5	2.0	131.7	0
16	3	151.1	150.0	152.0	41.7	37.0	48.4	1.6	1.2	2.0	1.4	1.2	1.5	121.0	1
17	2	159.4	156.0	162.8	52.7	52.1	53.3	1.4	1.2	1.5	1.1	1.0	1.2	130.6	0
合計	89														14

上記の健診結果より, 年齢が上がるにつれて身長・体重ともに成長していることが見て取れる。また, 男女とも年齢が低いほど最小値と最大値の差が大きいことも確認できる。ただし, 2018年度の「学校保健調査」によると, 日本の中学校1年生男子の平均身長は152.7cm, 平均体重は44.0kg, 女子の平均身長は151.9cm, 平均体重は43.7kg⁽²⁸⁾であるので, (日本の生徒と比較することが妥当かどうかはあるものの) カンボジアの生徒の数値とは開きがある。視力については, 同じ調査で, 日本の中学校生徒の視力非矯正者の裸眼視力は, 1.0以上: 42.31%, 1.0未満0.7以上: 9.35%, 0.7未満0.3以上: 12.76%, 0.3未満: 7.20%であるので, これと比較すればカンボジアの生徒のそれは良好といえる⁽²⁹⁾。体重に関して, ローレル指数の数値が120~130であれば標準, 160以上が肥満, 逆に100未満は痩せ,

(28) 文部科学省「学校保健調査」(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afiedfile/2018/12/21/1411703_03_1.pdf) (2019年1月7日現在)

(29) ちなみに, 数名の視力が悪いと診断された生徒については, 席の並びの配慮を行ったという。

と一般に判定されることから、この基準と照らし合わせるならバイヨン中学の生徒は標準から痩せの範疇にある。

この健診結果をめぐっては、「貧困家庭」に該当する生徒とそのローレル指数の関係にも触れている。1年生で貧困家庭に指定された生徒は27名おり、そのうちの11名（約40%）はローレル指数で110以下だったという。全体では195名中約25%が110を下回っており、貧困家庭にある子どもとその発育状態には相関がありそうだと言及している。学校の始業が朝7時の早朝であることや、経済的な事情から朝ご飯を抜く、朝食を取っても前日の晩の残りの冷や飯に水をかけただけの粗食の生徒も見られるので、彼らの栄養状態も注視していく必要があるとも述べている。

おわりに

以上、本稿では、カンボジアにおける教育支援・地域人材育成のあり方をめぐり一考察として、アンコール遺跡群の所在地であるカンボジアのシェムリアップに、遺跡の保全・インフラ整備・教育支援・地域人材育成などの推進を目的として設立された「アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構：Joint Support Team for Angkor Preservation and Community Development：JST」の取り組みについて検討を加えた。第1章でJSTの活動の理念および活動の概要、第2章ではJSTによる教育支援・地域人材育成の実際、第3章でJSTの教育支援・地域人材育成をめぐり背景としてバイヨン中学校の生徒の様相に関して論述してきた。

最後に、JSTが展開する教育支援・地域人材育成の取り組みの意義について指摘しておきたいが、それは、同組織によるスタンスや活動が、地域やここに暮らす人たちの境遇や意向に根ざしており、地域住民が置きざりにされていない点にあると考える。遺跡保全や子どもへの支援などいずれの事業にあっても、地域住民はその一方的な受け手に固定されておらず、彼ら自身も何らかの利益を引き出す側に立つことが期されている。世界に誇る遺産を有する土地柄であることから、同地域に暮らす人々が、遺跡の修復・保全、あるいは観光と結びついた仕事に携わることができるようになることを見据え、教育支援・人材育成や周辺地域のインフラ整備などをトータルかつ中長期的なスパンで円環的に推し進めていることに価値を認めることができる。

また、小出氏が述べているところであるが、JSTの強みは、カンボジア人であるチア・ノル氏が代表をつとめJSTと地域住民との橋渡し役になっていること、同組織のメンバーもカンボジア人を中核として各種取り組みが推進されていることである。そのため、常時支援可能な体制が構築できており、現地のニーズを的確に把握した対応が取れる。加えて、地元の要望に適応できることから活動の成果が容易であり、海外援助（特にロータリークラブなどの支援団体）が受けやすいという。

そのような好転にあるとともに意義あるJSTの教育支援・地域人材育成の取り組みだが、JSTの名称にある「持続的発展」という観点からすると、一考の余地があるとも思われる。JSTやこれが関与するバイヨン中学の運営がスムーズであるのは、チア・ノル代表⁽³⁰⁾とチョム・ルー校長の情熱・企画力・実行力・統率力に拠るところが大きい。ただ、今後も息の長い事業展開や拡充を図っていくには、両氏のように、現地住民の思いや要望を汲

みつづき気概を持って取り組みを先導できる有能な後進の育成に力を注いでいくこと、あるいはJSTやバイヨン中学に係る人たちがより協働的に事業に携われるしくみ作りを講じていくことも必要ではないであろうか。

引き続きJSTの動向に注目し、これを足がかりとしてカンボジアの教育支援・地域人材育成のあり方にアプローチすることを今後の課題としたい。

追記

本稿の執筆にあたっては、JST代表のチア・ノル氏、同組織スタッフの小出陽子氏、チョム・タウリー (Chhom Thavry) 氏、ボランティアの関西学院大学の学生のみなさん、バイヨン中学校長のチョム・ルー氏に、さまざまな形で貴重な情報を提供していただいた。ここに謝意を表したい。

(2019.1.10 受稿, 2019.3.3 受理)

(30) ここで、訪問時のチア・ノル氏と筆者とのやり取り、およびそこから筆者自身が感じ取ったことを記しておきたい。

筆者は訪問の際、愚問と認識しつつ、「教育は大切だと考えますか」と氏にあえてたずねてみた。ポル・ポト政権や内戦の只中を生きたその人が語る言葉をかねてから確かめたいと思っていた。

氏は、カンボジアが悲惨な歴史をふたたび繰り返さぬよう、そして、子どもたちが物事を正しく判断できるようになるために、教育は大切である、と答えた。

忘れがたい一言がある。それは、氏がアンコール遺跡界隈の道を運転しながら発した「ここがこんなになるなんて思わなかった」とのつぶやきである。ポル・ポト政権や内戦の混沌の最中で、アンコール遺跡の所在地シムリアップ出身の氏ですら、少年時代には遺跡へ立ち入れなかったとも聞いた。

その場所には今や世界中からの観光客があふれる。だが、歴史や文化を根絶やしにされ、ゼロからの立て直しを進めてきたこの国にも、昨今はグローバリズムの波が押し寄せる。就労して読み書きすらままならない子どもたちがいる一方で、シムリアップやプノンベンには高額なインターナショナルスクールに学ぶ子どもが存在する。

歴史的特異性・格差・貧困・児童労働など、カンボジアという国の教育事情の難しさを垣間見たのと同時に、夫妻の取り組みや子どもたちの表情から、この国の教育の可能性も確認できた訪問であった。

沖塩有希子：カンボジアにおける教育支援・地域人材育成に関する一考察

【別表：バイヨン中学生アルバイト状況一覧】

注) アルバイト代の使い道については、
 1 順に渡す、2 中学校の売店に使う、
 3 学校に必要なものを買う、
 4 塾代に使う、5 遊びに使う、
 6 その他(カッコ内に記載)と示す。

順	学年	性別	アルバイトの種類	アルバイトの名称	アルバイトの場所	アルバイトの曜日	アルバイトの時間	アルバイト代	アルバイトの用途
1	9	14	女	衣料品販売	バイヨン学校	土曜日・日曜日	14:00-18:00	目標2,000リール	中学校入学出費
2	9	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	7:00-17:00	目標15,000リール	中学校入学出費
3	9	15	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	7:00-16:00	目標15,000リール	中学校入学出費
4	9	15	男	レストランで販売	アンコールワットの館	日曜日	7:00-17:00	目標12,000リール	中学校入学出費
5	9	16	男	食品販売	アンコールワットの館	毎日	16:00-2:00	月給100リール	中学校入学出費
6	9	16	女	衣料品販売	アンコールワットの館	日曜日	7:00-17:00	目標10,000リール	中学校入学出費
7	9	17	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	ホームビザック市場(アンコールワットの館の横にある市場)	日曜日	7:00-12:00	目標8,000リール	中学校入学出費
8	9	17	女	衣料品販売	アンコールワットの館	日曜日	8:00-7:00	目標10,000リール	中学校入学出費
9	9	17	女	衣料品販売	アンコールワットの館(カヌーヤ)	日曜日	8:00-7:00	目標10,000リール	中学校入学出費
10	9	15	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	8:00-18:30	目標10,000リール	中学校入学出費
11	9	15	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	7:00-18:30	目標10,000リール	中学校入学出費
12	9	14	女	レストランで販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	13:00-17:00	目標10,000リール	中学校入学出費
13	9	15	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	13:00-17:00	目標10,000リール	中学校入学出費
14	9	15	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	13:00-17:00	目標10,000リール	中学校入学出費
15	9	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	7:00-17:00	目標10,000リール	中学校入学出費
16	9	16	女	食品の掃除、おまひ、オーダーの取寄せ	アンコールワットの館	日曜日	7:00-17:00	目標10,000リール	中学校入学出費
17	9	16	男	農機具の掃除、おまひ、オーダーの取寄せ	アンコールワットの館	日曜日	7:00-17:00	目標10,000リール	中学校入学出費
18	9	16	男	農機具の掃除、おまひ、オーダーの取寄せ	アンコールワットの館	日曜日	7:00-17:00	目標10,000リール	中学校入学出費
19	9	16	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	7:00-17:00	目標10,000リール	中学校入学出費
20	8	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	8:00-21:20	目標10,000リール	1.2.3(順に金額に応じて渡す)
21	8	16	女	衣料品販売	アンコールワットの館	日曜日	8:00-17:00	目標15,000リール	1.2.3(自分の収入に使う)
22	8	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	8:00-17:00	目標10,000リール	1
23	8	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	7:00-18:30	目標12,000リール	1.3
24	8	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	7:00-18:30	目標12,000リール	1.3
25	8	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	7:00-18:30	目標12,000リール	1.3
26	8	15	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	7:00-18:30	目標12,000リール	1.3
27	8	15	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	日曜日	7:00-18:30	目標12,000リール	1.4
28	8	15	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	12:00-17:00	目標10,000リール	1.4
29	8	15	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	12:00-17:00	目標10,000リール	2
30	7	13	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	17:00-18:30	目標20,000リール	1
31	7	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	土曜日・日曜日	7:00-18:30	目標20,000リール	1
32	7	15	女	小学生の家庭教師(国語・社会・化学など)	近所の家	毎日	17:30-18:00	目標4,000リール	1
33	7	15	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	19:00-21:00	月給150リール	1.2.3
34	7	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:00-17:00	目標20,000リール	1
35	7	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:00-17:00	目標20,000リール	1
36	7	15	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
37	7	13	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
38	7	13	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
39	7	13	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
40	7	13	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
41	7	13	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
42	7	15	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
43	7	15	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
44	7	13	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
45	7	13	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
46	7	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
47	7	16	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
48	7	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
49	7	14	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
50	7	14	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
51	7	13	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
52	7	13	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
53	7	13	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
54	7	14	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
55	7	14	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
56	7	14	男	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
57	7	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:30-18:30	目標5,000リール	1
58	7	17	女	レストランで販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	8:00-18:00	目標20,000リール	3
59	7	14	女	レストランで販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	7:00-10:00	目標100リール	2
60	7	12	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	18:00-17:00	目標10,000リール	4
61	7	14	女	食品販売(菓子・パン・飲料)	アンコールワットの館	毎日	6:00-8:00	目標25,000リール	1

【抄録】

筆者は、アンコール遺跡群の所在地であるカンボジアのシェムリアップに、遺跡の保全・インフラ整備・教育支援・地域人材育成などの推進を目的として1994年に設立された「アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構：Joint Support Team for Angkor Preservation and Community Development：JST」（以下、JST）の取り組みを見聞する機会を得た。

そこで、本稿では、同組織が手がけている上記の事業のなかでも教育支援・地域人材育成に焦点をあててケース・スタディーを行った。

JSTの展開する取り組みは教育支援・地域人材育成における成功例ともいえるので、カンボジア全体としての教育支援・地域人材育成の実相に迫ることにはならないかもしれないが、同組織による事業を足がかりに、カンボジアの教育支援・地域人材育成のあり方を検討することに一定の意味があるものと考えた。

第1章ではJSTの活動の理念および活動の概要、第2章ではJSTによる教育支援・地域人材育成の実際、第3章ではJSTの教育支援・地域人材育成をめぐる背景としてバイヨン中学校の生徒の様相について検討を加えた。